大正時代の杉並小史

元(一九一二)年　中野駅から約二・五キロ離れた高円寺までの人力車の運賃一二銭。

二(一九一三)年　京王電鉄笹塚―調布間が開通。新宿―堀之内間に青バスが開通。

四(一九一五)年　杉並区域の総戸数二五一四戸。うち、農家は一四〇五戸。全域に米・大麦・小麦・キビ・ヒエ・サツマイモ・ジャガイモ・大根・干大根・たくあん漬が作られる。杉並村にカブ・ゴボウ・タケノコ、井荻村にナス・キュウリ、高井戸村にウド・タケノコ・ウリが作られる。井荻村・高井戸村は養蚕・養鶏が盛んで、井荻村の繭の出荷量は豊多摩郡で第一位を占めた。高井戸村からは杉丸太の出荷が盛ん。四か村で最初の煉瓦造り西洋館、キリスト教団が天沼にできる。

五(一九一六)年　野菜の手取り価格は、ナス五五〇個入り一籠が一三銭五厘～一五銭、キュウリ二〇〇個入り一籠が七～一〇銭、麹町の店の小売価格はナス六〇個が一〇銭だった。中野貯蓄銀行荻窪支店が四か村で初の銀行として開店する。

六(一九一七)年　全域で草ボウキ作りが盛ん。

八(一九一九)年　中野―吉祥寺間に中央線電車の運転開始。古屋久綱氏邸に四か村で最初の、中野局一〇九番の電話が架設。

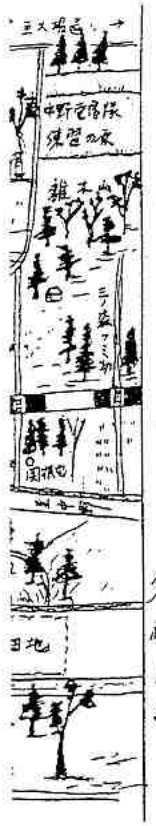
4　大正時代の天沼

(1)　大正初期の天沼

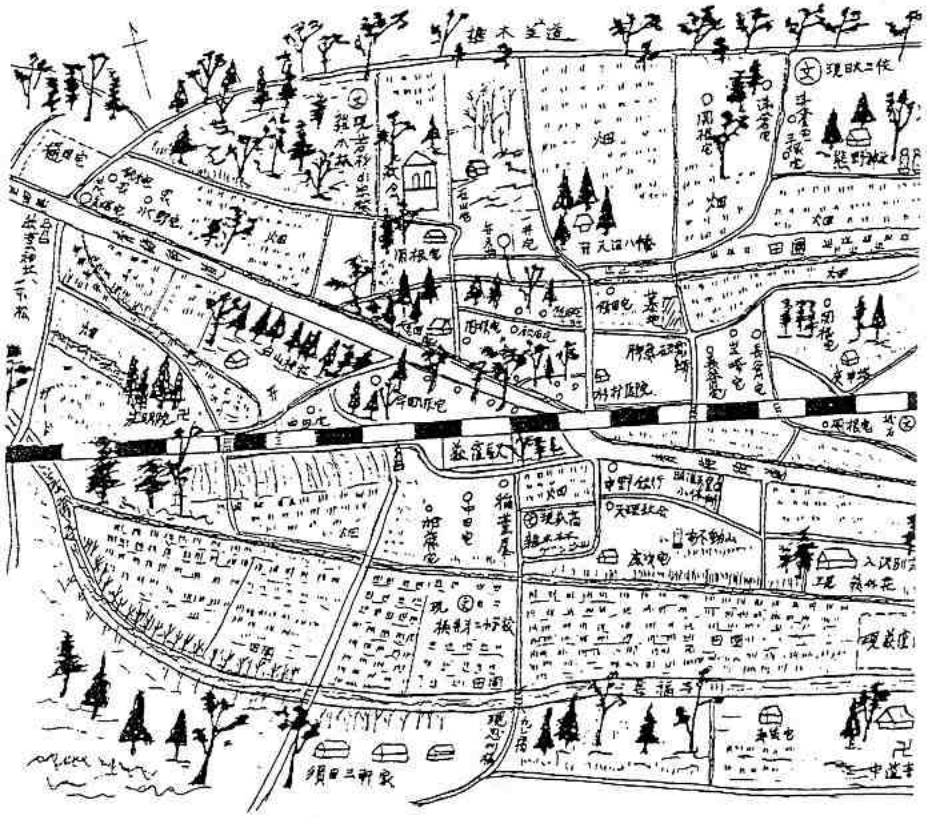
古老の描いた絵地図①　すでに「荻窪駅の開設」のところでもその資料を活用させていただいているが、明治三十八(一九〇五)年に上荻窪村で生まれ育って、荻窪駅北口で家業の仕立業を受け継ぎ、爾来、荻窪商店街の発展に寄与してこられた矢嶋又次さんは、古稀を迎えて、自家版『荻窪の今昔と商店街の変遷』という本をまとめられた。天沼とほとんど同じ生活圏のことを描いた、貴重な回想記録である。この本の巻頭に置かれた大正初期の荻窪駅周辺の折り込み地図をはじめ、随所に絵を入れて幼いころの体験を再現してくれているので、往時の情景を実に生き生きと思い浮かべることができる。

絵地図は荻窪駅が中心なので、残念ながら天沼の本村はカットされているが、中谷戸と宝光坊の大部分が描かれている。また、現在の杉五の位置の表示がないが、中央の上の部分、天沼八幡の北にある広い麦畑の北西部がそれにあたる。

八幡社や熊野神社の森のほか、若杉や天沼教会のあたりも雑木林で、現在の日大通りにも雑木が並んでいる。地図の右手、桃園川の下流付近に雑木山があり、その南側の中央線と接するところは三ノ森フミ切とある。青梅街道に面した荻窪駅の北側にも林が多い。耕地はほとんど畑で、田んぼは桃園川に沿って帯状につづいている。もとより、この地図は六〇年以上も前の記憶によっているので、細部にわたっては記憶ちがい、印象の濃淡もあろう。しかし、天沼の南部



矢嶋又次さんが描かれた大正初期の荻窪付近略図（昭和52年２月作成）



全域でナス・キュウリ・大根の生産が盛んで出荷高が激増。たくあん漬が農家最大の副業となる。

十(一九二一)年　青梅街道の新宿―荻窪間に西武軌道会社の路面電車が開通。

各村でスイカが作られる。市場での手取り価格は一個八～一〇銭。

井荻村に電灯がつく。

十一(一九二二)年　中央線の高円寺・阿佐ヶ谷・西荻窪駅が開業。

荻窪駅前に四か村最初の銭湯、寿湯が開業。

十二(一九二三)年　関東大震災で、末世之福音社の印刷所が崩壊する。

杉並区域四か村の全半壊家屋は一三〇、焼失家屋なし、負傷者二。

十三(一九二四)年　荻窪特設電話組合が電話架設業務を始める。

杉並村が町になる。

十四(一九二五)年　養老ホーム浴風園が設立。

井荻町土地区画整理組合の設立が認可。

十五(一九二六)年　小学校の授業料が、尋常科は月三〇銭、高等科月一円となる。

井荻村・高井戸村が町になる。和田堀之内村は和田堀町になる。

杉並警察署が創立。

中野郵便局杉並分室が開設。

はこのような感じの農村だったことがよく分かる。

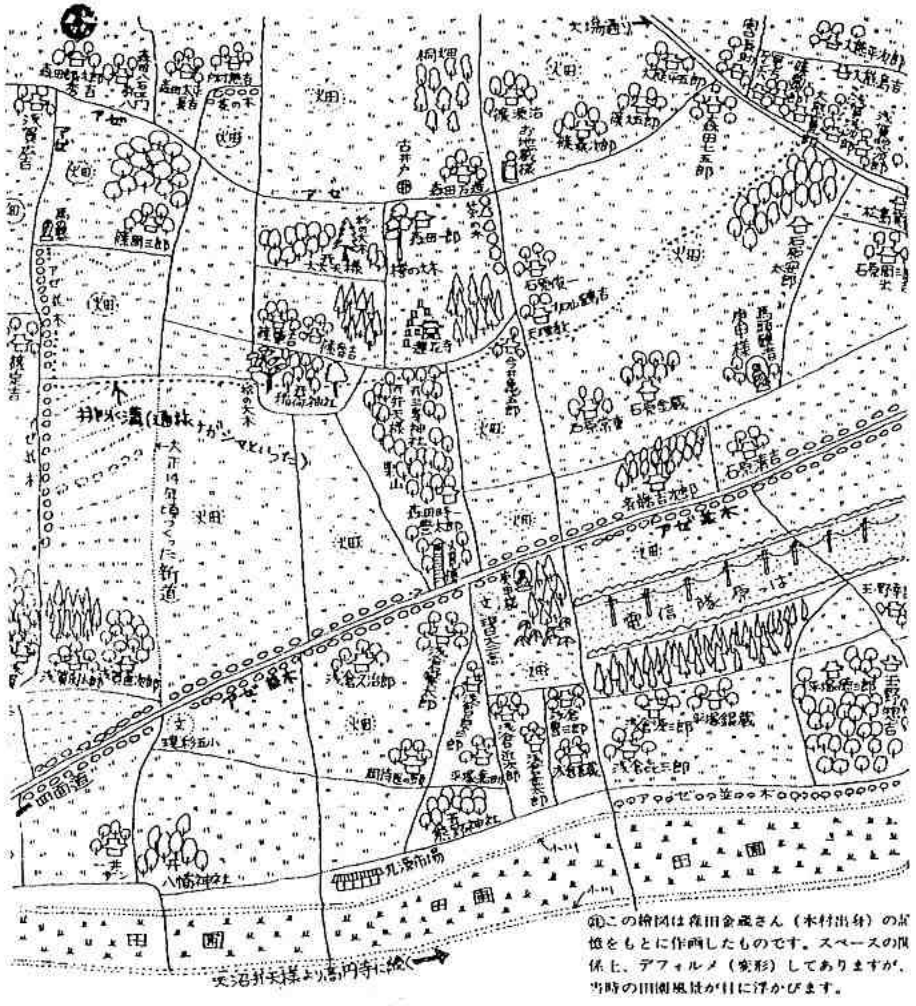
農家には関根姓が多く、ほかに浅倉、平塚、石山、一井、矢嶋、水野、岩崎、長谷川、飯田、鈴木などの姓がある。天沼八幡の南東にある墓地は、周りをぎっしりと人家に囲まれて今も同じ位置にある。

墓地の南側に都築脚気研究所があり、医薬品を製造していた。現在の八幡通りの青梅街道近くには、杉村医院がある。杉村医院は往診用のおかかえ人力車を持ち、院長の杉村宅郎先生は、後年、杉五の創立期の校医を勤められた方である。

古老の描いた絵地図②　実に幸運なことに、わたしたちは矢嶋さんの絵地図とは別に、本村を中心にして明治から大正にかけての天沼を描いた、もう一人の古老の絵地図を目にすることができる。明治四十二(一九〇九)年に本村の農家に生まれ、ここから桃野学校に通われた森田金蔵さんが、昭和五十二(一九七七)年に作られた自家版『杉並村の天沼／明治大正時代の想ひ出話と画』のなかにその絵地図が出ている。

絵地図は、森田さんの記憶をもとに第三者が作画しているが、火の見やぐら、馬の墓、ケヤキの木、茶の木、アゼ並木、古井戸、新道、排水溝など細部にわたっている。本村の家数は四二軒で、森田、浅賀、篠、松原、関口、松島、石原、斎藤、加山、板倉、山賀、大熊、戸村、見方などの姓があった。この地図の南東部の玉野姓があるあたりは阿佐ヶ谷村だろう。さすが地元の人だけあって、宝光坊の浅倉姓、平塚姓の家の分布についても、矢嶋さんの絵地図よりも詳しくなっている。八幡神社と熊野神社の中間

森田金蔵さんの記憶をもとに描かれた明治から大正時代の天沼（本村）絵図


この絵図は森田金蔵さん（本村出身）の記憶をもとに作画したものです。スペースの関係上、デフォルメ（変形）してありますが、当時の田園風景が目に浮かびます。
天沼弁天様より高円寺に抜く
八幡神社
熊野神社
田園
田園
田園

杉並の水田耕作

杉並区域は全域にわたって水田は乏しく、水田耕作は農業活動の中心ではなかったが、換金用の作物として重要であった。しかし後になると、米は次第に自家消費用として限られた価値をもつにすぎなくなる。このようなわけで、稲作よりも畑仕事が優先され、水田の作業は、畑作のできない雨降りの日を選んでしたものだという。

大正の初めまでは、ツミタ(摘田)と呼ぶ種籾をじかに本田に点播する水田直播栽培が行われていた。摘田を行った大きな理由の一つは、他の農作業との競合をさけるためだった。特に養蚕の盛んであったころは、養蚕の最も忙しい時期と田植え時期が重なるために、収穫量が少なくても摘田が好まれた。

摘田は、早春に田うないをし、五月中旬ごろまでに播種を終える。摘田の欠点は、植田とちがい除草に三倍もの手間がかかる、籾の発芽がふぞろいなので、これを間引いて株数を整え補植するのに骨が折れるなどで、養蚕がさびれ蔬菜栽培に転換するにつれて、労力配分の必要から摘田をする意義が失われ、だれもしなくなってしまった。

(『新修杉並区史』下による)

付近に、すでに丸源市場が出ている。この市場は、天沼二丁目の現在阿部理髪店が建つ地点にあった。

荻窪駅北口通り商店街図　矢嶋又次さんの本には、明治末年から大正初期にかけての荻窪駅北口通り商店街図も掲げられている。駅にはまだ北口が設けられていないが、青梅街道の北側に、大堀魚茂店、藤沼薪炭店、飯田屋料理店、浅倉青物店、鈴木肉店、渡辺豆腐店、清水芋店があった。また、現在は上荻一丁目で当時は天沼であった一画には、北島大正庵、大久保傘店、矢嶋足袋店の名が見える。いずれも天沼の商店のハシリで、創業が明治三十(一八九七)年ごろの店も何軒かあったそうである。

電信隊の原っぱ　もう一度、二人の古老が描かれた天沼の絵地図にもどろう。矢嶋さんの地図の右上、森田さんの地図の右中央部よりやや下、現在の日大二高の東側に「中野電信隊練習の原」「電信隊原っぱ」と示されているところがある。この付近から東に向かっての帯状の原は、中野駅の北側付近まで延々二・五キロもつづいていた。

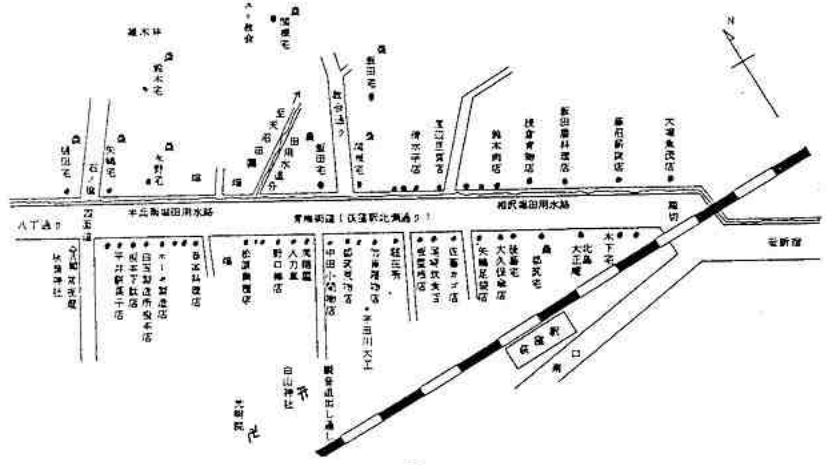
そもそも、現在の中野駅北口のサンプラザや中野区役所のある付近は囲町(かこい)といって、ここを中心に西は高円寺駅の北側近くにまで及ぶ広大な約一〇〇ヘクタールの土地が、史上名高い五代将軍綱吉の「生類憐れみの令」に基づく、江戸幕府の野犬収容施設であった。最盛期には、八万数千頭の犬が養われていたという。

明治政府は、その跡地を陸軍用地にして軍事施設を置いた。甲武鉄道の開通と同時に、ここに陸軍鉄道隊が創設され、鉄道線路の敷設や機関車の運転訓練の演習場として、馬橋を経て天沼までの幅四、五〇メートルほどの細長い土地が、新たに陸軍に買い上げられたのである。

鉄道隊は大正二(一九一三)年に千葉県の津田沼へ移転し、その後は、陸軍中野電信隊の電線架設訓練をする演習場になった。戦前の天沼の子どもたちは、コイルに電線を巻いたドラムを背負って、兵隊たちが汗みどろになって訓練するのをよく見物に行ったそうである。気球も電信隊の風物で、風のない日にはよく揚がっていた。この原っぱは飛行場として計画されたこともあったようだが、結局は狭すぎて立ち消えになったという。

洋館と外国人　大正三(一九一四)年、四面道の三〇〇〇坪(一ヘクタール弱)の土地が囲いで仕切られ、一画に杉並最初の煉瓦造り二階建の西洋館が建設された。そして、青い目をし

明治末期より大正初期の荻窪駅北口通り商店街図(矢嶋又次さん作成)



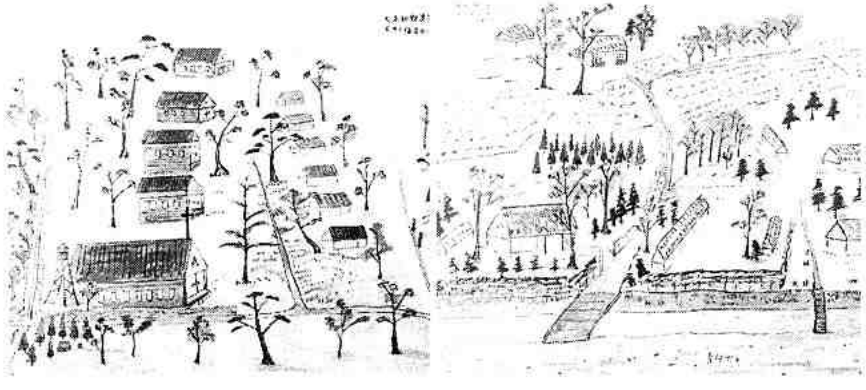
た何人かの外国人が日本人とともに住み始めたから、西洋人を見たこともなかった村人は仰天した。

これはキリスト新教セブンスデー・アドベンチスト教団の牧師さんたちで、建物は印刷所と教会を兼ねた本部のほか、彼らの住宅があった。自家発電の装置を備えていて、夜は洋館の窓々から漏れる電灯の光がきらきらと輝き、薄暗いランプの明りしか知らない村人の目に、お伽の館のように妖しく美しく映った。初めのうち村人たちは、末世之福音社という教団のうわさを口にするのに思わず声をひそめて、教団や建物をヤソ教、外国人牧師をヤソと呼んでいたという。

矢嶋又次さんが、幼いころの記憶をたどって描いた二枚の絵には、松と杉の木立に囲まれた福音社の建物群と給水塔が見える。青梅街道の北側沿いに用水路が流れ、教団に向かう道には欄干のない木の橋がかかる。これが現在の教会通りだろう。

東京衛生病院の五十年記念アルバム『献身』によ

末世之福音社と青梅街道の絵（矢嶋又次さん画）



杉並村の職業別調査
大正四年（単位戸）

農作	四〇九
植木造園業	二五
養蚕	九
動物飼養	五
石工等	六
ブリキ職	二
鋳造師	三
車製造	四
薬製造	二
生糸撚糸	七
染物	七
製本帳綴	一
経師表具	一
桶樽製造	八
竹具製造	一四
蔓品製造	二二
竹木雑品	一一
畳刺	一
建具製造	三
精穀製粉	二
豆腐製造	二
菓子製造	二
醤油製造	一
製茶	七
裁縫	二
足袋製造	三
履物製造	一
湯屋	一
理髪業	一
大工	一六
左官	四
屋根ふき	五
土木建築	六
活版印刷	三
物品商	五一
周旋業	二
旅館下宿	一
飲食店	一七
人力車夫	七
運輸運搬	九
馬丁	一
軍人軍属	四
官公吏	八
神教関係	二
僧侶	一五
宣教師	三
学校教員	七
医師	四

ると、下の写真に「本部と称している建物はこの辺の名物で、洋館といわれて親しまれ、雑木林の中に、ちょうど軽井沢の別荘地のごとき観を呈していた。」と添え書きされている。敷地内には大正六(一九一七)年に天沼教会や伝道学校も竣工した。伝道学校の建物は、同八(一九一九)年にミッションスクール天沼女学院となり、戦前の中央沿線に住む信者の子女たちが通学した。

トマトの話　当時十二、三歳だった森田金蔵さんは、大正八(一九一九)年ごろ、外国人の牧師さんが育てるのを見て、初めてトマトを栽培したそうだ。実ったトマトはうまそうに色づいたが、ひと口かじると何とも青臭く、思わず吐き出した。こんなものが果たして売れるものかと半信半疑で兄さんと市場へ出したところ、ナスやキュウリが一〇〇個八〇銭ぐらいの相場のとき、トマトはなんと、八個六〇銭の高値で仕切られたのだった。これを聞きつけて、翌年はどこの農家もトマトづくりを始めたということだ。

日曜学校など　大正二(一九一三)年に宝光坊で生まれた平塚ゑひさん(現姓都築)は、当時と

完成したころの教団本部

獣医　一
蹄鉄工　一
遊芸稼人　六
その他の庶業　一五
その他の有業者　六
無職者　三九
計　八〇四

杉並村産物表
（大正四年）

☆蔬菜類
ナス　一五〇〇〇〇貫
　　一五〇〇円
ニンジン　一六〇〇〇貫
　　三二〇円
ゴボウ　三〇〇〇〇貫
　　四二〇円
蕪青　三〇〇〇貫
　　三四〇円
大根　七六〇〇〇〇貫
　　三三六〇〇円
☆大根製品
乾大根　――
切乾大根　――
沢庵漬　七八七〇樽

してなかなか進歩的だったお母さんの勧めで、震災前のしばらくの間、兄さんや姉さんに連れられて天沼教会の日曜学校に通ったそうである。外国人の牧師さんは日本語がとても上手で、話も分かりやすく、日本人の牧師さんも話がおもしろくて、日曜学校に行くのが楽しかったそうだ。ただ、外国人の牧師さんも日本人の牧師さんも、挨拶のとき、男どうしでも大げさな身振りで抱き合ってほおずりをしたりするので、それが不気味でいつしか行かなくなってしまったと言っておられた。

日曜学校はその後もずっとつづけられ、大正末年から昭和の初めにかけては、夏休みに弁天池のほとりで、教会主催の林間学校も開かれて、創立期の杉五の卒業生にも、楽しみながら新しい文化にふれた、幼少時代の懐かしい思い出をもつ人が多い。

(2) 桃野小学校天沼分教場

蓮華寺にできた教室　明治四十（一九〇七）年に、それまで四年制だった義務教育が尋常科の六年間に延長になった。就学率は日露戦争後の富国強兵策を反映して高まる一方で、それは大正にはいっても変わらなかった。

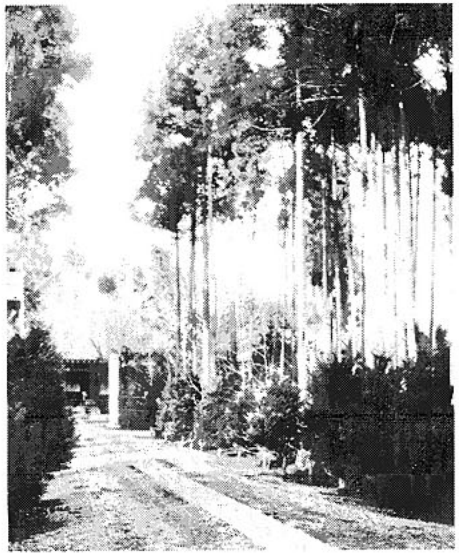
学童の増加で収容しきれなくなった桃野小では、天沼蓮華寺の一室（三間半×一間半）を借り受けて、大正六（一九一七）年六月一日から分教場を開設した。正式名称は杉並村桃野尋常高等小学校天沼分教場といい、天沼に住む尋常科一・二年生が通う教室だった。天沼には昔から寺子屋はなかったから、これが天沼に最初にできた教育施設で、杉並第五小学校の創立記念日六月一日は、蓮華寺に分教場が開設された日に因っている。桃野小学校

☆家畜
牛　一三〇〇〇円
馬　五四頭
豚　二〇頭
鶏　一三三頭
　　二七五〇羽
　　卵四七〇〇円
☆醸造
横倉醤油製造所　三五九石

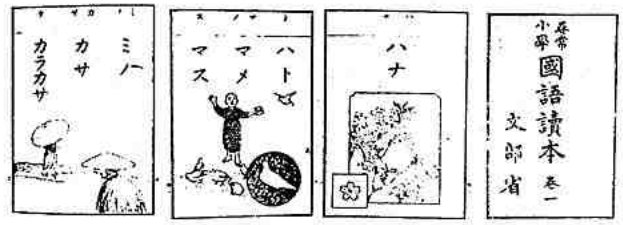
を本校と呼び、三年生以上はこれまでどおり阿佐ヶ谷の本校へ通った。

蓮華寺の教室を体験したのは、明治四十三（一九一〇）年四月から大正七（一九一八）年三月までに生まれて、一・二年生のとき天沼に住んだ子どもたちである。

分教場の生活　分教場の担任は藤原一嘉先生で、最初の年は男女一八名の一・二年生が複式授業を受けた。一人の先生が二つの学年の子どもを一度に教える授業である。本堂の隣の板の間の教室に机と椅子を二側に並べ、墓地に面した右側が一年生、本堂に近い左側が二年生の席であった。黒板は真ん中を白い線で仕切って、右半分を一年用、左半分を二年用と分けて使


杉木立に囲まれていた蓮華寺（昭和7年）

桃野尋常高等小学校分教場が開校したころの蓮華寺（大正6年）



分教場の子供たちが習った教科書から
読方一年生の巻頭
ハナ、ハト、マメ、マス、ミノ、カサ、カラカサ

い、授業は、先生が一年生に読み方を教えているとき、二年生は黒板の計算練習をする、といった具合に行われた。唱歌や体操は合同でやった。

子どもたちは朝早く先生よりも前に分教場に行くのが楽しみで、いつも先に着いて待っていた。やがて先生の姿が畑の向こうから見えると、参道まで飛び出していって、「先生おいでになったよ。」と口々に言いながら迎えたものであった。

当時の蓮華寺はまわりに人家はなく、杉木立に囲まれていた。現在の内門のところに石柱が二本立ち、参道の敷石が一列に現在の外門まで通じていた。参道の両側も杉並木だった。本堂のわきにあったホオとサルスベリは、今も大きな茂みになっている。

通ってくる子どもたちの服装は、木綿の筒袖の着物に、わら草履か竹皮草履で、雨の日は高下駄をはき、からかさをさして行った。鼻汁を横なでに拭くので、どの子の袖も乾いて、てかてかに光っていたが、祝日(四方拝・紀元節・天長節)には、よそ行きを着せてもらって、式に出るために本校へ出かけた。なかには袴をつけた子もいた。

現在の蓮華寺正門

勉強道具は風呂敷に包み、小脇にかかえて通った。走って帰るときは風呂敷包みを背中から斜めに結んだが、道で友だちとふざけ合ううちに包みがほどけ、勉強道具が飛び散ったりした。

なにしろ、教室の隣が板壁一つ隔てて本堂なので、お葬式などで本堂が使われるときは、子どもたちも気を使って、おとなしくしているのが大変だった。先生は、子どもたちをできるだけ外に連れ出すように努められたようである。

現在の杉五の玄関にあたるあたりは、四―五〇〇坪(約一五アール)の村有地だった。当時、今の日大通りは大八車がやっとすれ違えるくらいの狭い村道で、分教場の子どもたちはそこを先生に引率されて、ときどき村有地へ草刈りに出かけた。低学年とはいえ、いずれも農家の子だから草刈りも結構しっかりできて、作業が終わるとそこで体操をやってから、満足して意気揚々と寺まで引き揚げてきた。

お寺では遊び場がないので、子どもたちは休

大正10年に蓮華寺分教場に通った子どもたち

修身一年生の教科書

チユウギ

キグチコヘイハ　テキノ　タマニ　アタリマシタガ、シンデモ　ラツパヲ　クチカラ　ハナシマセンデシタ。

ウソヲ　イフナ

コノ　コハ　タビタビ「オホカミガ　キタ」ト　イツテ、人ヲ　ダマシマシタ。ソレデホンタウニ　オホカミガ　デテ　キタ　トキ、ダレモ　タスケテ　クレマセン　デシタ。

ベンキヤウ　セヨ

ココニ　二人ノ　ヲトコガ　キマス。二人ハモト　オナジ　ガクカウニ　キマシタ。一人ハ　センセイノ　イマシメヲ　マモラズ、ナマケテ　バカリ　キタノデ、コンナ　アハレナ　人ト　ナリマシタ。一人ハ　ヨク　センセイノ　ヲシヘヲ　キイテ、ベンキヤウ　シタノデ、イマハ　リツパナ　人ニ　ナリマシタ。マカヌ　タネハ　ハエヌ

み時間に鬼ごっこをして墓地に逃げこみ、ときには墓石を倒してしまうこともあった。住職にしかられると、用務員の森田らくさんがかばって何度も頭を下げ、一緒になってあやまってくれた。

当時の住職は元世尊院住職の菅錦堂さんで、その後、大正十四(一九二五)年に下村聖栄さんが住職になり、戦後、網代智等さんが跡を継がれた。現在、網代智等さんは女人高野で名高い奈良県室生寺の管長になられ、蓮華寺住職を兼務しておられる。

分教場の担任は、大正十二(一九二三)年から、秋本愛之輔先生に代わった。

子どもたちの遊び　村の子どもたちは、家に帰ると近所どうし、分教場の子も本校へ通う子も学年の枠がはずれ、みんなして集団で遊んだ。男の子は凧揚げ、竹馬、独楽(こま)回し、めんこ、輪回し、石蹴り、鬼ごっこなどをした。鬼ごっこは降参鬼ともいって、相手を捕まえるだけでなく、ぶったり首を絞めたりして、「まいった」と言うまで放さない荒っぽい遊びだった。女の子はシャゴ(おはじき)、お手玉、綾取り、まりつき、通りゃんせ(天神様)などを、日が暮れるまで飽きず遊んだ。

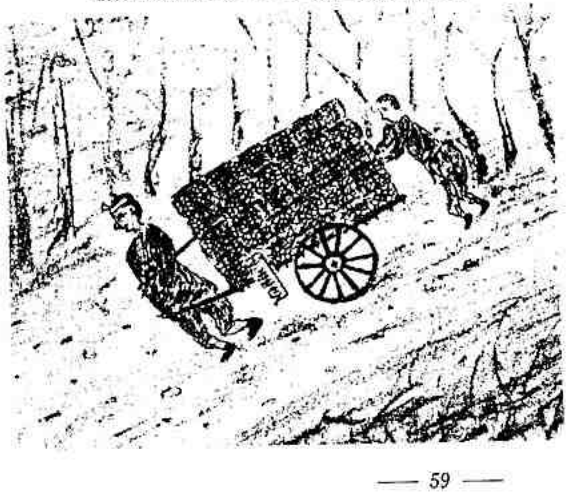
ちょっと足を延ばして妙正寺川に行けば、タナゴやフナがいくらも網ですくえた。用水にミミズで流し針を仕掛けて一晩置くと、ウナギやナマズがかかった。野山にはいれば、アヤメやチョウチンバナ・リンドウなどが咲いていたし、木イチゴや草イチゴ・グミ・クワの実なども手軽に採れて口にほおばることができた。

農業と子ども　蓮華寺時代の思い出として、森田弥一さん(第一期)は、遠足で中野駅から電車で行ったことがあったと語っておられる。中野駅に集合なので、麹町(千代田区)まで下肥(しもごえ)を汲(く)みに出かける父親の大八車に便乗して行った。大八車には肥たごが前に四つ、後ろに四つ積まれていた。帰りも待ち合わせて中野駅からその車に乗ってきたが、今度は肥たごの中がはねてピチャンピチャン音がする。それが何の苦にもならなかったのは、子ども心に下肥運びが農家の大事な仕事であることを承知していたからだろう。大正にはいって油糟や魚粉など金肥を畑にまくようになったが、主力はやはり東京の町家から大八車で運んでくる人糞だった。当時は農家が汲み取り代金を支払っていた。農家が料金を受ける側になったのは、震災以後である。

大八車は、農家の必需用具であった。季節の〝せんざいもの〟である新鮮なキュウリ・ナス・スイカ・カボチャ・モミ(間引き)大根・トウモロコシ・イモ類なども大八車に満載して、築地市場や神田市場・東洋市場(淀橋)へ運んだ。

築地や神田へ行くときは夜中の二時ごろに天沼を出た。荷が重いうえに道中は坂が多いので、子どももついていって車の後押しをした。そのために学校を休むのは、先生も大目に見た

朝荷を引いていくところ（森田金蔵さんの絵）



天沼で歌われた童歌

数え唄

一つとや
一夜明くれば賑やかで
お飾りさげたり松飾り
二つとや
二葉の松の色のよさ
三階松に笹の色
三つとや
皆さん子供衆は楽遊び
おらくで遊んで羽根をつく

まりつき唄

高い山から谷底見れば
猫が嫁とる鼠が仲人
廿日鼠が貧乏笊提げて
裏の細道チョコチョコ
参る
さらば一貫貸しました
つきました

お手玉唄

一番初めは一の宮
二はまた日光中禅寺
三は佐倉の宗五郎
四はまた信濃の善光寺
五つは出雲の大社
六つは村々鎮守様
七つは成田の不動様
八つは谷原の長命寺
九つ高野の弘法様
十は東京招魂社
是程心願かけたのに
浪子の病はなおらぬか
向かうごろごろ鳴る汽車は
浪子と武夫の別れ汽車
しどう絶えない汽車の窓
泣いて血を吐く不如婦

一つがあらがら

一つがあらがら
二つ芙蓉の木
三つ蜜柑の木
四つよろずの木
五つ銀杏の木
六つむくれんじょ
七つなつめの木
八つ八重桜
九つ小梅の木
十で一貫かしました

ようである。市場の帰りには、牛飯(八銭)、かけそば(三銭)、今川焼き(一銭)、アンパン(二銭)、大福(八個一〇銭)などを食べさせてもらうのが楽しみだったと、森田金蔵さんは述懐しておられたそうだ。

(3) 農村としての天沼

行商の人たち　青梅街道の荻窪駅に近いあたりこそ、ややにぎわい始めたが、まだ当時の天沼は、駅をはなれると店らしいものもない畑と林ばかりの農村だったので、よそからいろいろな行商人が売りにきた。頭に小さな万国旗のついたたらいを載せ、太鼓をたたきながらあめを売るおたんこあめ屋、中野のほうから塩ザケやイワシを売りにくる魚屋、行李を背負ってきて子どもたちに四角い紙風船をくれる越中富山の薬売り、かさ直し、いかけ屋、下駄の歯入れ屋、油屋などがときどき現れた。

森田弥一さんの幼いころの記憶では、穀物を俵に詰めるときに使う唐箕とか、雨の日の農作業に着る簑などの修繕の御用聞きに回ってくる、口数の少ない男の人たちがいた。彼らは二、三人で組になってごくたまにやってきて、各農家から集めたものをどこかへ運んでいって修繕し、一週間から十日後に直したものを届けにきた。その男たちがどこで直すのか、どこに住んでいるのか、農家の人はだれも知らなかった。後年、山窩

天沼へ行商に来る人（森田金蔵さんの絵）

にくわしい作家の三角寛さんに幼いころのその話をすると、「それは間違いなく山窩の人たちですよ。山窩は自分たちの仕事場や住んでいるところを知られるのを極端に嫌いました。秩父、奥多摩、山梨との県境の大垂水峠の先、おそらくそういった山奥を転々と移動して暮らした人たちだったのでしょう。」と言われたそうである。

ゴゼの宿　森田弥一さんの生家では、新潟ゴゼ(瞽女)の宿をしていたそうである。ゴゼとは、三味線を弾き、唄をうたって村々を回って歩く盲目の女旅芸人のことで、その起源は室町時代にまでさかのぼるという。毎年、春になると三人連れのゴゼの一行がやってきて、森田さんの家に泊まった。彼女たちは、前夜は高円寺か馬橋辺に宿をとり、朝はこちらに来る道中を門付けして歩いて天沼の家々を何軒か回ってから、夕方泊まりに来る。その夜は、森田さんの家の座敷に農家の人々が集まってきて、「祭文松坂　佐倉宗五郎一代記　舟止めの段」などのゴゼ唄を聞く会が催された。年に一度か二度、こうしてゴゼ唄を聞くのが、昔から農村の人々の数少ない娯楽の一つになっていた。その哀調を帯びた唄声と三味線の音は、意味は分からないながら子どもの心にも響くものであったようだ。ゴゼは昭和五(一九三〇)年ごろまで、毎年回ってきたそうである。

天沼に飛来した大ワシ　天沼や井草の農家では、取り入れた稲や麦を脱穀すると籾のまま保存しておき、必要な分だけ、大場通りにあった関口精米所へ持っていって、精米や精麦をしてもらっていた。料金は現金ではなく、精製した現物のうちのなにがしかを置いてくるのがならわしだったそうである。精米所の当主関口長助さんのところは、こ

花一匁

古里まとめて花一匁
勝って嬉しい花一匁
負けて悔しい花一匁

蛍来い

蛍来い　山道来い
行灯の光を見て　飛んで来い
ホーホー　蛍来い
あっちの水は　苦いぞ
こっちの水は　甘いぞ
甘い方へ　飛んで来い

おはじきの唄

いちじく　にんじん
さんしょに　しいたけ
ごぼうに　むかごで
ホイ

うちのお父さん

うちのお父さんは
餌差しが好きで
裏の細道
ジョナジョナ行けば
見れば小枝に
小鳥が三羽
お前餌差しか
わしゃムクの鳥
ご縁があるなら
また来ておくれ
今日はこれにて
おいとまいたす
アア、パサパサパサ

ハゲドンドン

ハゲドンドン
見てやあれ
背伸びして
御光の光に
勝るは此ハゲ
ハエが止まれば
つるりと辷る
暗い時でも
灯はいらず

七草なずな

七草なず菜
唐土の鳥と
日本の鳥と
渡らぬ先で
ストトン　トンヨ

（森田金蔵さんの『明治大正時代の想ひ出話と画』から）

の近在でただ一軒だけ猟銃の免許を取得していた。

大正十一（一九二二）年の年が明けて間もないある日の昼過ぎのことだそうだが、天沼の横田鉄造さんが何気なく冬晴れの空を仰ぐと、大きな松の木の枝に、これまで見たこともない巨大な鳥が止まっているので、すっかりたまげてしまった。そこで、息せききって関口さんのところまで注進に及んだのである。長男の関口喜恵之助さんが猟銃を持って現場に駆けつけると、話のとおり、怪鳥は松の枝に翼を休めて悠々とあたりを睥睨（へいげい）している。「まさしくワシにちがいない。それにしても、あれだけの大ワシが天沼にくるとは……。」と高鳴る胸の鼓動をしずめながら、喜恵之助さんはねらいを定めてズドンとぶっ放した。確かな手ごたえがあって、ワシはよろよろしながらもしばらく飛んでから、本村の九条さんの竹藪のなかに落ちた。喜恵之助さんは夢中で竹藪に走って、倒れている鳥を見つけた。ところが、近づいた喜恵之助さんの気配に気づくと、それまで死んだようにぐったりしていたワシは、いきなり頭を起こし、王者の貫禄を誇示して羽を広げ、猛然と威嚇した。不意を衝かれた喜恵之助さんは、あわてて猟銃を振り上げ、台尻で何度もぶったたいて、ようやく仕留めることができた。羽を広げると二メートルを超す大もので、体重も七キロに近かった。

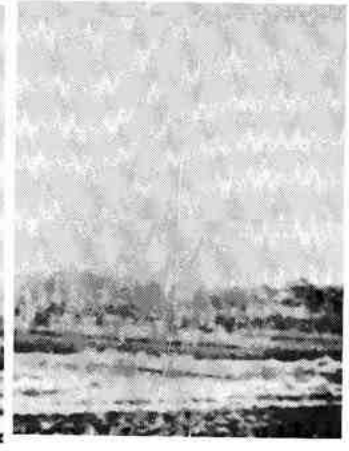
うわさはたちまち広がって、天沼はもとより近在から見物人が押しかけた。当時、喜恵之助さんは二十歳そこそこの若者だったため、手柄を父親に譲った。それで、世間には当主の関口長助さんが撃ったと流布されたのである。

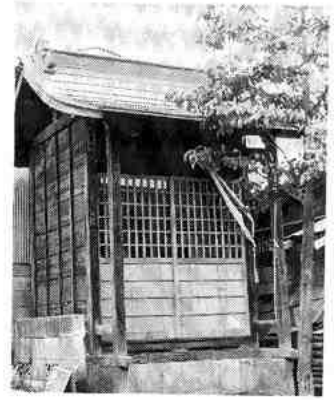
奥多摩でもめったに見かけることのない大ワシが、どうして天沼に降りてきたのか、と人々は不思議がった。「こんなばかでかい鳥を撃ち殺して、たたりでもあっては大変だ」というわけで、関口さん宅では庭の一隅に祠を建てて、「大鷲（おおとり）神社」として手厚くおまつりした。

大ワシは剝製にされて、神社のご神体になっている。

神社は、その後、早稲田通りに移されて、いわゆる「お酉様」として熊手も売られ、今もたいそうなにぎわいをみせている。大ワシは思いがけない福を呼び込んだのである。現在は下井草一丁目になっているが、三〇年前の住居表示変更までは、ここも天沼の一画であった。

中谷戸から天沼八幡神社と宝光坊を望む（大正13年）





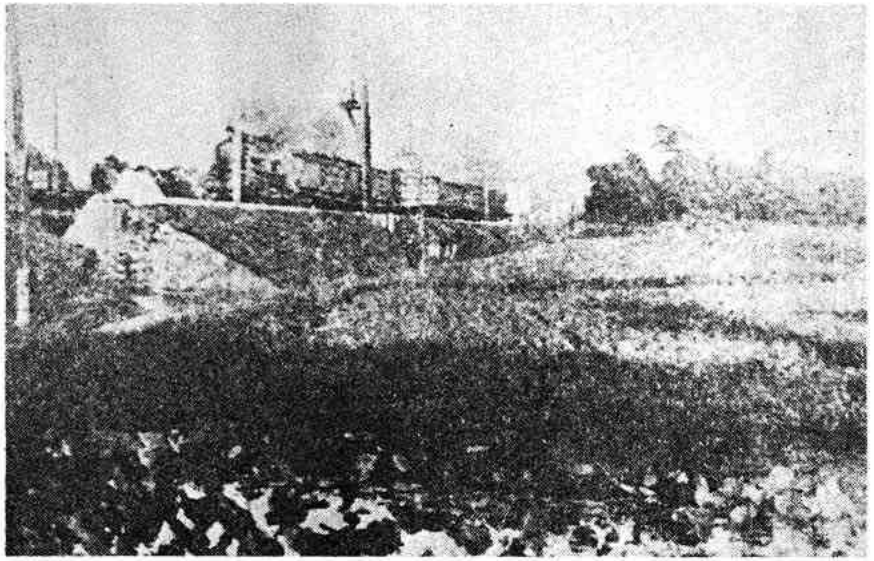
大鷲神社

(4) 天沼の近代化が進む

中央線の電化　大正三(一九一四)年に東京駅が完成して、すでに東京―中野間を走っていた中央線の電車は、同八(一九一九)年一月から複線になって運転区間が吉祥寺まで延長され、荻窪駅も電車停車駅になった。屋根からポールが二本突き出た長さ約一〇メートルの小さな木製の電車が、翌九(一九二〇)年には現在のパンタグラフ方式に改良され、車体の大型化と性能のアップで運転回数も増し、都心への通勤がいっそう便利になって、荻窪駅の周辺に住宅を建てて引っ越してくる人が増え始めた。天沼でも駅に近い中谷戸や四面道では目だって林や荒地が開かれて、住宅が建っていった。それに伴って、青梅街道の荻窪駅に近い商店の数も増えていった。大正九(一九二〇)年の天沼は戸数一六三、人口九四四になっていて、明治末年の倍に近い。

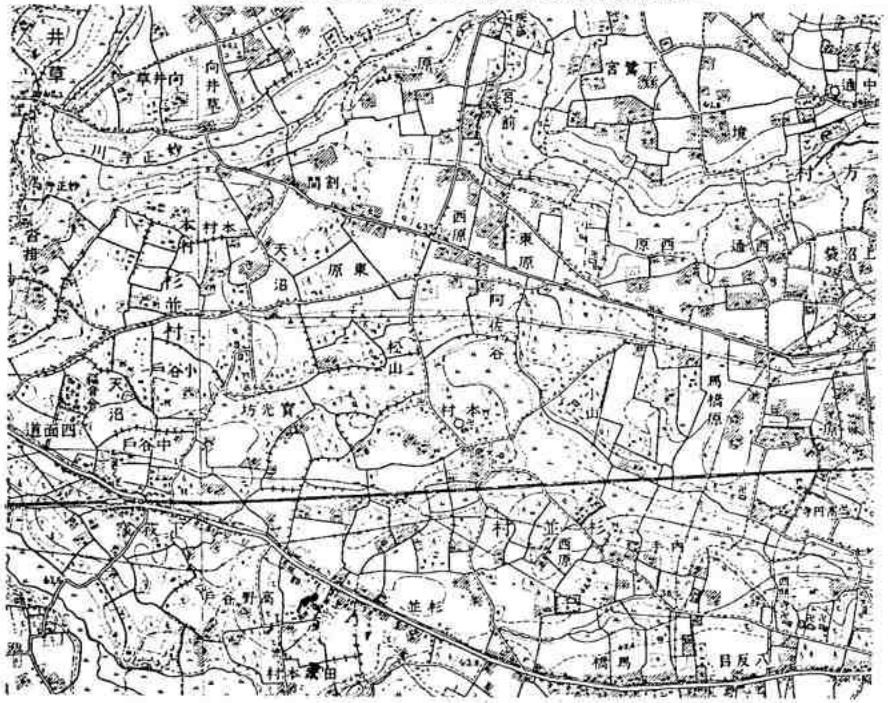
青梅街道と路面電車　青梅街道に路面電車を通す計画は古く、日清戦争が終わって間もなく堀之内軌道会社が軽便蒸気車で淀橋(成子坂辺)から短距離間の営業をしたものの、事業不振ですぐにやめてしまった。経営権を継承した西武軌道会社が二〇年ぶりに工事を復旧し、大正十(一九二一)年に淀橋―荻窪間六キロで電車の運転を始めた。

杉並村には天神前、妙法寺口、高円寺、馬橋、西馬橋、阿佐ヶ谷、田端、成宗、天沼、荻窪の順に停留所があった。天沼停留所の位置は現在の阿佐ヶ谷南三丁目にあたるが、その名残が都電、都バスに引き継がれて、天沼陸橋を東に下りきった最初のバス停



大正時代の中央線を走る貨物列車（ガードのところは善福寺川）

大正6年のころの天沼を中心とした地図（まだ路面電車はない）



天沼で歌われた民謡

餅つき唄

一、目出度ナーエ
　目出度目出度
　「やれそだ」
　唱って　つく餅は
二、一夜ナーエ
　一夜明ければ
　「やれそだ」
　やれ　神ぞなへ

豊年唄

今年や　ナーエ
　今年や　世がよい
　「やれそだ」
　豊年どして
稲に　ナーエ
　稲に穂が出て
　「やれそだ」
　穂に穂がさいて
枡が　ナーエ
　枡がいらぬで
　「やれそだ」
　やれ箕でためす
箕では　ナーエ
　箕ではまだるい
　「やれそだ」
　やれ桶だめし
桶じゃ　ナーエ
　桶じゃまだるい
　「やれそだ」
　やれ倉だめし

これらの唄は昔から天沼地方で農仕事のとき盛んにうたわれたもので、昭和初年にはラジオで放送されたこともあった。

（昭和八年「杉五後援会『校報』から）

が今なお「天沼」になっているのがうれしい。

開通当時の西武電車は単線で、朝夕は一時間間隔、日中は二時間間隔で、一〇分程度の交換待ち合わせは普通だったという。終点の荻窪と村役場の前には馬の水飲み場があって、馬が水を飲み始めると電車はストップするので、乗客はあきらめてその様子を黙って窓から見守っていたそうだ。

当時の青梅街道は幅が五間（約九メートル）の道路で、天沼停留所のところから中央線の南側を西に進み、踏切（現在の地下道の場所）で斜めに交差して線路の北側に通じていた。踏切の三〇メートルほど東に西武電車の終点荻窪停留所があった。

天沼に電灯がともる　天沼に電灯がともったのも、青梅街道を西武電車が走った大正十（一九二一）年から翌年にかけてで、大ワシが飛来したのとほとんど同じ時期である。

当時の電球は先端がとがっていて、子どものころ座敷で飛び上がった拍子に頭をぶつけてはよくけがをしたと、西尾慎三さん（第九期）が語っておられた。当初は夜間だけ点灯する定額制であった。それまで、ランプのホヤ掃除は専ら手の小さい子どもの役目だったから、子どもたちはようやくその労役から解放されたことになる。

阿佐ヶ谷など三駅開設　大正八（一九一九）年ごろ、阿佐ヶ谷の有志が鉄道省へ新駅誘致の陳情に行って、係官から、「あんな竹藪や杉山ばかりのところに駅を造ってもしかたがない。いくら文明開化の世の中でもキツネやタヌキは電車に乗らないから。」と一蹴されてきたという話が残っているが、大正十一（一九二二）年七月、中央線に高円寺・阿佐ヶ谷・

西荻窪の三駅が開設されて、十一月には電化区間が国分寺まで延長した。いまや中央沿線に住まいを求める人々はどんどん増えていた。

天沼でも、荻窪駅を中心に移入人口が目に見えて増加していることは、杉並最初の銭湯である「寿湯」が、この年に青梅街道（現在の荻窪勧業ビルのところ）で営業を始めていることからもうかがえる。

(5) 関東大震災とその後の天沼

天沼の被害軽微　大正十二（一九二三）年九月一日午前一一時五八分、関東地方は激烈な地震に見舞われた。わけても東京・横浜は震度七・九に達し、余震は一二九三回に及んだという。地盤の弱い東京下町では家屋の倒壊が特にひどく、おりあしく昼どきであったことから、各地に起こった火災が強風にあおられて全市を焼きはらい、被害をさらに甚大にした。死者・行方不明者は一三万人を超え、焼失家屋は四〇万戸を上まわった。

杉並で最初に開業した寿湯（大正11年）

当時二三歳の青年で阿佐ヶ谷に住んでいた北島英一さんは、その日を

大地震のときの話

東京一の映画館だった溜池の葵館で弁士をしていたとき、仲間が面白半分に、葵の紋は徳川家だから徳川の夢のような声だと言いだし、堂々たる徳川夢声という名前がついた。

その売り出し中の彼が愛宕警察署に呼び出され、こってり油をしぼられていたのが、九月一日だった。それというのも、説明者免許証の再交付手続きが大幅に遅れていたのだ。観衆の前では自信満々の彼も、ここでは平あやまりの一手、なのに警察官はまことにつっけんどんで、何かというと、貴様、免許証取り上げだと、憎々しげにどなるのである。

ふり返って次のように述べておられる。

九月一日は八朔の節句で農家は休日だった。朝から雨が降ってむし暑かったが地震の起こる直前に晴れた。私の家では一尺角の欅の大黒柱が土台からずれ、庭に積んであった米俵やたくわん石がゴロゴロと崩れた。夜になると市の中心部あたりの空が真っ赤になり、赤い入道雲のようなものがあがっていくのが見えた。(中略)阿佐ヶ谷駅は水田を埋め、盛土をして線路を作り、その下の低い所に駅舎があった。これは一年ばかり前に建てられたものであったが、地盤が弱かったのでホームが崩れて駅舎も壊れ、汽車は一か月以上も停車できなかった。駅の近くに建ち始めていた、瓦をのせた骨組みだけの家はつぶれたが、世尊院、天祖神社、杉一小など古いわらぶき屋根の建物は壊れなかった。家が少なかったので火災はなかった。(『杉並第七小学校五十年』から)

天沼では、この地震で、キリスト教団の印刷所が倒壊した。そのとき、印刷所の職員や家族は教会の礼拝に出ていて、賛美歌が終わるところであった。もしも地震が数分後だったら大きな人的被害が出ただろうと、神の慈愛に感謝する教団の記録がある。

真っ赤に染まった東京の空を眺め、余震を恐れて竹林の中でまんじりともせず一夜を過ごした人も多かった。その後十日間ほど、竹藪に蚊帳を吊って寝た人もいたという。

地震の二、三日後、横浜・品川のほうから来た暴動朝鮮人が潜んでいるというデマが天沼にも伝わり、手に手に鍬やとび口を持った自警団の人々が血相変えて下井草との境のカヤの林を取り囲んだが、むろん何の形跡もなかった。駅や青梅街道の要所要所にも自警団員がたむろして、朝鮮人の襲来に備えていた。

下戸塚(早稲田)の下宿屋で地震に遭遇した作家の井伏鱒二さんは、立川から先の鉄道が

地震がやってきたのは、そのときだった。第一回の激震が静まって気がついてみると、署内はガランとして、向かい合った巡査とただ二人だけ。とたんに巡査も免許証どころではなくなって、よろしく取り計らってやるという始末。彼はにこにこして外へ出た。

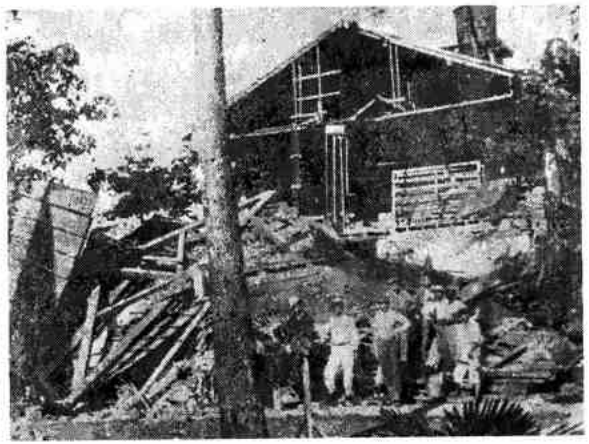
壊滅した銀座から日本橋辺りを歩きながら、彼はあまりのひどさに唖然とした。もう当分活動写真が興行されることはあるまい。何をして食いつなごうかと大いに悲観せざるをえなかった。

しかし、日々食べるだけは、救護所へ行けば何とかなった。幸いにも、間もなく『報知開通したと聞いて、故郷へ帰るべく、大久保から二昼夜がかりで中央線を線路伝いに立川駅まで歩かれた。このときの荻窪付近での体験が、次のようにつづられている。

阿佐ヶ谷駅はホームが崩れて駅舎が潰れていた。荻窪駅では線路の交叉している場所に、大きな深い角井戸があって、そのなかに鉄道の太い枕木が二本も三本も放り込まれていた。なにかの呪いではないかと思われた。貨物積みのホームがちょっと崩れていたが、大した被害は受けていなかった。ここから駅の南口に出て、人だかりがしているところに近づくと、蕎麦屋の前の広場で茶の接待をして、消防の絆纏を着た男と巡査が、数人の避難民に鉄道の情報を知らせていた。

(『関東大震災直後―豊多摩郡井荻村―』「新潮」昭和五十六年四月号)

関東大震災で倒壊した教団本部



豊多摩郡杉並町大字天沼　震災を契機に勤め人の職住分離の必要が叫ばれて、東京市から郊外に住宅を求める人々は加速度的に多くなり、地勢や交通機関に恵まれた杉並村の人口は急増した。ささやかでも郊外で庭付きの文化住宅に住みたいというのが、東京という大都会に生活する庶民の願いであり、また、会社員・銀行員などの月給取りが文化的な職業として、あこがれの対象となった。文化生活の一つとして、へっついを廃し

新聞』の企画部に入社できた。入社早々の仕事は、トラックに乗って鰹節や沢庵や佃煮を「報知新聞の廉売があります」と焼け残りの山の手を売り歩くことだった。一週間ほどして、今度は移動新聞の第四班として千葉県下へ出張を命じられた。印刷能力を失った新聞社として、記者に口の新聞の役割を受け持たせて、地方読者にサービスしたのである。

大地震の実写を持ち回ったから、至るとこで大盛況だった。『報知新聞』の名で活動写真を無料で見せ、読者を増やす商略である。県下各地を回ったが、立看板にはいつも「報知新聞記者、福原駿雄先生御講演」とある。はじめはできるだけ謙虚な態度で舞台に立ったが、それでは観衆は静まらない。一転して傲然たる態度をするとぴたりと静まり、大成功であった。

（『夢声身上ばなし』大正の夢から）

夢声さんが天沼へ越してこられたのは、昭和二年、お住まいは寿湯の裏手にあった。

て台所の近代化が図られたのもこのころである。

大正九（一九二〇）年に五六三二人であった杉並村の人口は、同十四（一九二五）年に三万六六〇八人、昭和五（一九三〇）年に七万九一九一人と、五年間に六・五倍、一〇年間に一四倍という高い増加率を示した。これは、東京市郊外の八二町村のうちでも、荏原町（現品川区内）の一五・五倍に次ぐ第二の高率であった。

このため、杉並村は大正十三（一九二四）年六月から町制をしいて杉並町となり、近隣の井荻・和田堀之内（実施後は和田堀）・高井戸の三か村も、同十五（一九二六）年からそれぞれ町制を実施した。けれども、人口の増加があまりにも急速なため、教育・道路・上下水道・保健衛生などの施設は、どの町もとうていそれに追いつかないありさまであった。

ちなみにこの時期の荻窪駅乗降客一日平均数は、大正十一（一九二二）年に一八〇〇人だったのが、十二（一九二三）年二六三〇人、十三（一九二四）年四四九〇人、十四（一九二五）年七一二三人、十五（一九二六）年一万〇四一一人、昭和二（一九二七）年一万二六〇三人と、年平均二一六〇人ずつ増えている。

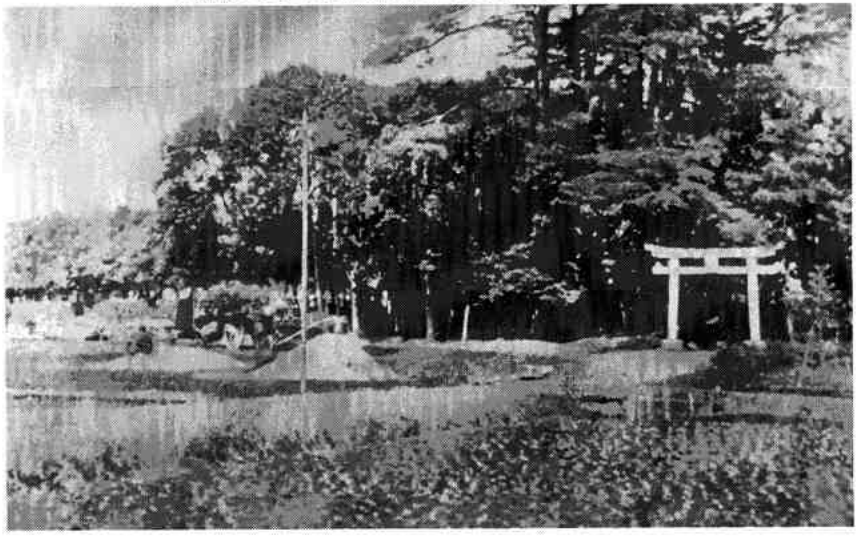
城右女学校　郊外に移りたいと願うのは、個人ばかりではない。学校も同じである。大正十三（一九二四）年、天沼の中央線南側にある宝光坊の土地（現在は阿佐ヶ谷南三丁目）に、城右高等女学校が東大久保から移転してきた。前身は水谷実科女学校といい、定員が二〇〇名ぐらいのこじんまりした学校で、家庭的な良妻賢母教育を目指した。現在は文化女子大学付属高等学校になっている。

(6) 天沼分教場の校舎新築

深刻な教室不足　後を絶たない転校生の増加で、本校である桃野小学校の教室不足は深刻だった。町当局はこの事態を少しでも解消するべく、焼け石に水のような努力をつづけた。大正十三（一九二四）年の新学期からは、そうでなくても狭い蓮華寺分教場に、天沼在住の三年生も収容するという苦肉の策をとることになり、一年生と二・三年生の二学級編成で二部授業を行った。しかし、七〇余名の児童では全くの過密状態で、満足な授業を進めるのが困難であった。

杉並町では、緊急に一万七四四〇円の予算を計上して、蓮華寺の子どもたちが草刈りに通う天沼字宝光坊五七六番地（現在の天沼二―四六）の空き地に、桃野小学校天沼分教場の校舎を新築することに決

大正13年ごろの天沼八幡神社のあたりは一面の水田であった



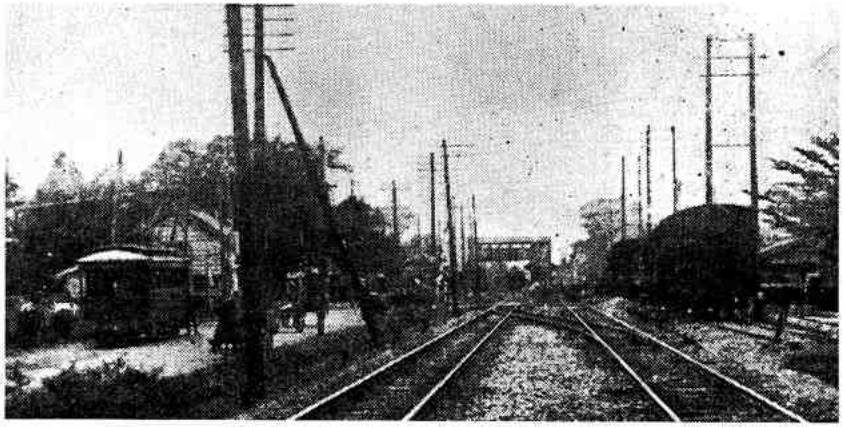
まった。

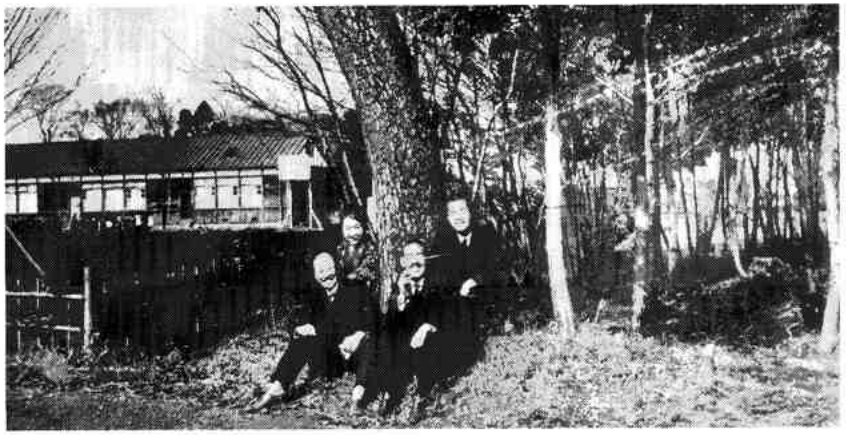
このときの天沼は戸数三六三、児童数二二六名で、蓮華寺分教場ができた七年前は一・二年生で一八人だったのが、今は一年生だけでも五一人になっていたのである。

木造平屋建一棟七九・五坪、教室数三の工事が完成して、天沼分教場の新校舎は大正十三(一九二四)年九月から使われた。このときから四年生も分教場で学ぶことになり、一年生から四年生まで一六九人の授業が三学級編成で開始された。三・四年生は複式だった。教室と廊下と便所があるだけで、ほかに何の設備もなかったが、借り物ではない本物の学校が地元にできたということだけで、天沼の子どもたちはうれしかった。式のある日に本校へ行っても、もう「線香くさい」とは言わせなかった。

杉五待望の声高まる　ひきも切らない転入生に、天沼分教場の新校舎はたちまち手ぜまになった。桃野小学校の分校から独立して高円寺原小学校が新設され、町制実施とともに桃野小学校が町立杉並第一尋常高等小学校と改称して、杉並町の四つの小学校が創立順に(第二=成田小、第三=高円小、第四=高円寺原小)ナンバーを冠して呼ばれるようになると、「一日も早く天沼に第五小学校を造るべきだ」と切願する声がわき起こった。

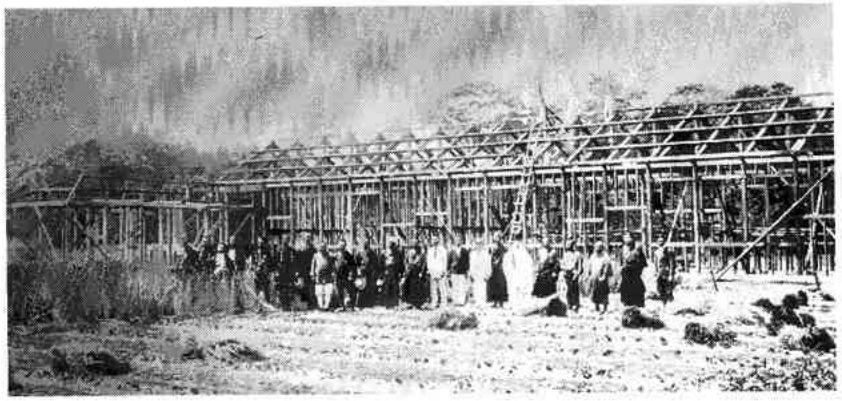
阿佐ケ谷側から見た大正13年の荻窪駅（左は西武軌道電車の荻窪停留所）





平屋校舎の天沼分教場と先生方（大正15年3月）

桃野尋常高等小学校天沼分教場の上棟式（大正13年5月）



本稿は杉並第五小学校創立七十周年記念誌「新 天沼・杉五物がたり」から
著作権者杉五同窓会の許可を受け転載しています。執筆者は元杉五小教諭 人見　稠 氏です。